

平成28年度 第2回東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成28年11月8日(火)
開会10時30分 閉会11時45分

2 会 場 東広島市役所本館4階404会議室

3 出席者 (構成員)
東広島市長 藏田 義雄
東広島市教育委員会
教育長 津森 毅
委 員 渡部 和彦(教育長職務代理者)
委 員 織田 壽子
委 員 坂越 正樹
委 員 長嶋 香穂里
委 員 京極 秀樹

(説明のために出席した者)
副市長 槇原 晃二
政策企画部長 西村 克也
学校教育部長 大垣 勇人
生涯学習部長 天神山 勝浩
企画課長 神笠 秀治
指導課長 祭田 学

(事務局関係)
総務部長 前延 国治
総務部次長兼総務課長 木原 岳浩
総務課 課長補佐兼行政経営係長 大石 美廣
行政経営係 主査 植木 沙美

4 議 事 (1) 東広島市教育大綱に基づく取組み内容について
～基本指針3-1 国際交流、多文化共生社会の推進
「国際感覚豊かな人材の育成」

5 内 容
○開 会

○藏田市長あいさつ

○議 事

(1) 東広島市教育大綱に基づく取組み内容について

<藏田市長>

それでは早速でございますが、会議次第にありますとおり、2の「議事」に入ります。

(1) 東広島市教育大綱に基づく取組み内容についてでございます。本日は、大綱に定めております「基本指針3 国際学術研究都市として」のうち、「国際交流、多文化共生の推進」にテーマを絞り、「国際感覚豊かな人材の育成」について意見交換を行い、方向性を共有させていただきたいと思っております。

はじめに、議事につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

それでは、議事につきまして、ご説明いたします。

本市の特徴の一つとして、外国籍の方の割合が多いことが上げられます。市の総合計画におきましても、「国際交流の推進と多文化共生のまちづくりの推進」を掲げ、国籍や民族の異なる人々が、同じ地域社会の一員として、心豊かに安心して暮らせる多文化共生のまちづくりを進めております。

また、教育委員会でも、こうしたまちづくりの担い手として、子どもたちの国際感覚の醸成を図るべく、様々な事業に取り組んでおられます。

「国際交流、多文化共生の推進 国際感覚豊かな人材の育成」は、本市がスローガンとして掲げております、「国際学術研究都市」の実現にとって、重要な項目の一つでありますことから、本日の議題とさせていただきます。説明は、以上でございます。

<藏田市長>

ありがとうございました。ただいまの説明に付け加えまして、本市の外国籍の方の状況等について政策企画部長から説明をお願いします。

(政策企画部長説明【資料1】)

<藏田市長>

ありがとうございました。

次に教育委員会事務局から具体的な取組み事例につきまして、ご説明をお願いいたします。

(学校教育部長説明【資料2】)

<藏田市長>

ありがとうございました。語学力が必要ということは、今後必須だろうと思いますので、英語教育の充実に取り組まなければならないと思っています。これから、グローバル社会ということもあり、子どもたちにはコミュニケーションの為にも必要ということでもあります。皆さんの方で、英語を学ぶためにこういった方法があるとか、英語と何かを組み合わせるとか、そういった思いをお持ちではないかと思っています。子どもたちの将来のことを考えて、ご意見をいただければと思います。坂越先生、いかがでしょうか。

<坂越委員>

本市は英語の先進拠点ということで取り組んできておりまして、これからその成果が問われる、成果が現れてくるものと思います。これは織田先生に聞いた方がいいのかもしれませんが、これから、英語が教科化されてきたときに、いま一番言われているのは、どう小中連携をしていくのかということです。小学校で楽しく英語活動をやっていたのが、中学校に入ったらいきなり単語を覚えろと言われて、嫌いになってしまったりすることがないように、ということがよく言われています。実際に御園宇小学校で取組まれてきていて、これが中学校に入ってから、どう評価されているのかという検証をしたものはあるんでしょうか。

<織田委員>

教科ではなかったので、語学力をつけることがねらいではありませんでした。英語活動は、慣れ親しむというのが大きな目的でありました。私も、書くこと、読むことを少し取り入れた方がいいのではないかと、言う思いはしていました。そうしなければ、子どもたちが、学ぶことを漠然とした形でしかできないし、中学校との繋がりの部分で物足りないものを感じていたのですが、当時は、読ませるな、書かせるなという文科省の指導がありましたので。ただ、個人的にはやはり、中学校へ繋げるという意味で、もう少し目に見える形が欲しいとは思っていました。

<藏田市長>

ありがとうございました。慣れ親しむというところは、日常生活でいかに使いやすくするかという環境作りも大切ではないかと思っています。先日、女子の硬式野球の話がありまして、今までは英語の野球用語が全然分からなかったのが、やっているうちにどんどん覚えてくる。楽しんでやっているうちに、自然と覚えていくというような環境作りが必要ではないかと思っていますが、なにかいいアイデアがありましたら、京極先生いかがでしょうか。

<京極委員>

はっきり言ってしまうと、海外へ行けば、すぐに話せるようになってしまう訳です。本市にはたくさんの外国の方がいらっしゃいますので、できるだけ交流する場を作ることが大事なのかなと思います。また、教材の問題もあると思います。例えば生活するのに、野菜の名前など、身近なものの名前が分からないんです。絵本なんかを見ると、そういった単語が出てきます。どうしても、必要を感じなければ身に付かないので、そういう場を作ることが大切ではないかと思っています。小中学校は話すことが大事なんだろうけど、社会人になると、書くことが大事になってきます。大学生を見ても、意外と書けないです。書かせると、文法もきちんと理解もするし、そういうことをしないと、身に付かな

いのかなと感じています。

<藏田市長>

いま先生が言われたように、企業でも、書ける人が少ないそうです。読む・書く・聞くすべてが揃っていれば、いくらでも採りますよ、と企業は言いますよね。

<京極委員>

インターネットの世界になってくると、話すよりも書くことの方が大事になってきます。これから本当に必要になってくるのは、そういうことかもしれないです。そこをどう教育するかは、非常に難しいところですけど。

<藏田市長>

教材として、楽しめるものを考えていただけたらと思います。

<長嶋委員>

教室で学ぶ国際理解のところで、料理を作ったりされています。音楽も、楽器などに一緒に触れることで、日本の楽器との違いを感じたり。そういったところから、自分たちのいいところ、外国のいいところを感じたり、また、言葉についても身近に触れることができるのではないかと思います。耳から情報を得るということも一つの方法だと思います。

<藏田市長>

確かに、聞くということは、刺激になっていいそうですね。しっかり聞いて、身に着けていなければと思います。このあたりで、渡部先生、何か思いがあれば。

<渡部委員>

日本の英語教育は、本は読めても話ができない。コミュニケーション能力が要求される場面がたくさん出てきたけれども、日本人はそこが弱い。ただ、小学校から文法を教えるということではできないので、遊びながら生活の中で身近なところで学ぶ体験型の学習は、小学生に向いているのではないかと思います。小学校の授業を拝見しますと、そういったことをきちんと捉えて教えているので、そこはきちんと活きているのではないかと思います。中学校では教室の中で教えるというのが基本になっています。その前の段階で、小学校の時に体験型で耳から聞いて発音も出来ていれば、中学校へ行った時に、良い連携ができると感じました。これが、子ども達の10年20年先にどう役立つかということは、これから検証する必要があると思います。本市の場合には、外国人留学生が多いことや、外国人の住民が多くおられます。非英語圏の方もたくさんいらっしゃるので、そういった中で国際感覚を学ぶ環境としては非常に恵まれています。これをもう一度見直して、組織的に、コミュニケーション能力をつけるために、うまく充実できるような環境づくりの配慮が必要ではないかと思います。

<藏田市長>

日本人は感情表現が苦手だと言われてきましたが、今はもう時代が変わっていて、どんどんやらなければならない。そういった中で、いま先生が言われた環境づくり、ジャイカや国際交流センターなどうまく連携できればと思うのですが。外国人の先生などへの支援も、これから大切だろうと思います。さらに、家庭からのバックアップも必要ではないかと考えますが、どうでしょうか。

<長嶋委員>

子どもだけではなく、家族単位でもいろいろなものに触れる機会を作るのが大事だと思います。例えば、美術館、音楽鑑賞など外国のいろんなものに触れるということを、子どもと一緒に体験していく環境があれば、家庭での話の中で、子ども達もそういったことに意識が向くのではないのでしょうか。

<藏田市長>

子どもを連れ出そうとすれば、まずは保護者の方が外国籍の方などと触れ合う機会が増えているということを感じてもらうことが大切ではないかと思いますが。

<織田委員>

家庭での親子の会話が、異文化理解や外国人の見方、考え方を左右すると思います。以前いた学校では、中国からの帰国者がたくさんいらっしゃいました。やはり、地域や家庭などで、少し偏見などがあったのではないかと思います。保護者や地域を巻き込んで、国際理解につながる講演会や、活動などをすることによって、随分と地域や保護者の考え方が変わり、それに子どもたちも影響されていたように思います。公民館で中国の方に餃子づくりを教わるという活動をしたことがあります。その時に教えてくださった、中国から帰って来られたおばあさんが、お店などで出会ったりすると、名前を呼んで懐かしそうに話をしてくださいます。その時に、あの活動も無駄ではなかったなと思いました。私自身もとても親しみを感じますし、おそらく地域の方も、多少は親しみをもちて見られるようになったのではないかと感じています。

<藏田市長>

そういう風に感じて頂ける間柄になれるというのは、すごいことですね。

今までは学ぶ立場のお話をさせていただきましたが、それでは教える立場として、保護者の方は、どう考えているのでしょうか。小学校から英語をやらなくても、いい中学校、高校へ行って、という考えもあるのではないかと思います。教育長さん、私たちはそういったことを心配しているんですが。学校の点数も取らないといけないですが、通用する子どもを育てようとする、そういったことも必要ではないかと思うんですが。

<津森教育長>

確かに東広島市は外国人の方と触れ合う接点がたくさんありますので、そういったところへ子どもを積極的に連れて行って、コミュニケーションをさせるということは、非常に大事だと思います。しかし、保護者自身がそれをやろうとする気持ちがあるかという、二の足をふんでいるのではないか、子どもを前に出して、話せ話せ、といことが多いのではないかと思います。ですが、保護者の方の英語への関心は非常に高いと思います。特に教科化ということで、小学校の5、6年でABCと成績が付く訳ですから。進学とかそういったことは別にしても、非常に関心は高いものがあります。学力的には、本市の英語教育は非常に高いですけども、さきほど京極先生からもありましたが、聞く、書く、話す、読むの中で、書くことが突出して良いです。他のところも数ポイントは高いですが、10ポイント以上高いのはそこです。一方で、外国人と積極的にコミュニケーションを取りたいですかという質問に対しては、中学生が県と同レベル、小学生は若干低いということが

あります。やはり国際感覚豊かな人材を育てるためには、会話力を伸ばさなければいけないのではないかと。今回小学校に外国語教育が入ってくるということは、これを契機と捉えて、本市の特色をPRしていかなければならないと思っています。やはりネイティブと話すことは大切です。たくさん予算もかかりますが、昔からJETプログラムで中学校にはALTに入ってもらっています。でも、月にたったの2回です。その他の授業は通常の教員が教えています。こういう機会をもっと増やしたいということもございます。やはり小学校の先生が英語を教えるということについては、しっかり指導力をつけなければなりません。小学校で700くらいの単語を読んだり書いたりするようになります。これはとても多い数です。小学校で習う漢字は千余りです。これだけの数を教えるとなると、相当の力が必要になると思います。先生の方から教えることだけではなく、児童生徒の方からも学びたいという意欲をどう引出すということ、そして受験など意欲のある子ども達にも、しっかりチャレンジさせたいと思います。

<渡部委員>

先ほどの、ネイティブの先生を授業に参加させるということは、とてもいいことだと思いますが、今は教材がとてもよくなっています。ネイティブな発音というのは、先生からではなくても、教材などで随分と補えるようになっていきます。ネイティブな発音が身に付くには大体12歳より前にやらなければ駄目だと言われています。日本では中学校から英語を学びますので、これではジャパニーズイングリッシュになるのは当たり前のことですね。それを前倒しして、きれいな発音をということなら、これは間違っていないと思います。だからといって、授業に外国人をたくさん雇うというのは、現実的ではありません。ですから、教材をうまく使う方法も、工夫するべきだと思います。

もう一つは、子どもが小学校のうちに英語を嫌いになってしまっただけでは困りますから、英語は楽しいという雰囲気づくりを先生が演出することも大事です。点数化するということは、結局筆記試験になるのではないかと、ということを心配しています。

そして、コミュニケーション能力というのは、英語も一つのツールですけども、本市では英語圏だけでなく中国、フィリピン、韓国などたくさんの国の方がいらっしゃいます。こういった人たちとどう仲良くなれるかというのは、家庭教育の中でも機会はあるのではないかと思います。子どもが話すときに、自信があるとうまくコミュニケーションができるのではないかと思います。これは、いま東広島市で治彼を入れている和文化教育、これをしっかり身に付けて頂いて、外国の方に対しても紹介ができる。こういったことが大切ではないかと思います。

最後に、授業参観などに行くと気になるのが、教室に外国人の児童がいて、本当にうまく日本語での授業に適応できているのだろうか、ということです。そのあたりのケアはしっかりできているか、ということが気になるところです。

<藏田市長>

外国人へのケアについては、どうでしょうか。

<大垣学校教育部長>

今年の6月時点ですが、小中学校で外国人の子どもが、22か国、210名ほどいます。

そのうち日本語が話せない子どもが70名ちょっと、日本語学級へ在籍しております。中には日本国籍を持ちながら、日本語ができないという子どももおります。基本的には日本語学級で日本語を学んでおりますが、授業にはなかなかついて行けていないというのが、現実でございます。

<藏田市長>

先ほど話の中で、単語を小学校で700、中学校で1,600~1,800、これはとてつもない量ですね。話してみれば、大した量ではないのかもしれませんが。小中高でしっかり話をしていったら、大学ではもっと幅広く、と思ってしまいますが。例えばちょっと掘り下げて勉強すれば、もっと視野が広がるのではないかと思います。京極先生いかがでしょうか。

<京極委員>

私のところは工学系なので、英語はちょっとという学生が多いですが、小中学校で英語を好きになれなかった学生が多いように思います。やはり、本人が必要性感じなければ、やらないと思います。それをどう感じさせるのか、ということを考えています。やはり動機づけが大事です。自分を表現できる自信がなければ、やはり相手との会話は進みません。そこがあって、初めて英語かなと思います。できるだけいろんな方と交流をするということをするしかないのかなと思います。

<藏田市長>

例えば、大学在学中にもっと留学を奨励してはどうでしょうか。

<京極委員>

自ら行く学生も結構います。私も学生を連れて1か月くらい行ったことがあります。1か月いれば、結構慣れてしまいます。そうすると今度は一人で行く学生も出てきます。やはり慣れです。どうやって慣らすかということが重要です。一番大事なのは、自分が五感を全部使って感じることです。外国人の方と交流する場をどう作っていくか、体系的にやっていくかということが大事だと思います。

<藏田市長>

本市には外国の方が非常に多くて、特に留学生は日本に来るために日本語を勉強して来られます。ある程度話せるようになって来ますと。こういう人たちに聞いてみますと、日本で頑張って勉強して、日本で就職したいという思いを持っておられます。目標を持って頑張っておられる方々、そういう方々は日本語と同時に英語も話せる方が多いですね。こういう方と小さいうちから交流したりする機会を、ジャイカなどを通してもっと増やしていきながら、外国の方は日本を学んでもらって、こちらは外国語をというふうにお互いにやっていくのがいいのではないかと思いますね。

<京極委員>

私たちが外国へ行った時も、向こうの大学では、着物の着付けや折り紙などで交流を持ったりしていましたが、こうした機会をもっと持つことが大切ではないかと思います。

<藏田市長>

あとは、子ども達が英語の授業にずっと入れるようにということですね。

<坂越委員>

日本に来ている留学生は、なぜ日本に来ているかというと、やはり日本が好きだからなんです。来たいと思って来ている学生が多いので、チャンスさえあれば、どんどん交流に参加していきます。インターナショナルカフェのようなものをどんどんやって頂ければ、学生たちも参加していくと思います。

それから、これは学校教育のことですが、今までうまくいってなかったものが、これから小学校に英語教育を取り入れたらうまくいくのか、ということですよね。10年やっても話せない日本人大学生。ただ、最近は教材や授業方法も含めてとても工夫をされてきていて、アクティブラーニングと言いますか、学生が積極的に関わっていく授業の仕組みもどんどん開発されているので、教員研修や授業に取り入れています。例えばクリスマスにおばあちゃんに手紙を書こう、というテーマで、書くことを始め総合的に勉強するというようなノウハウが出てきています。単語や文法だけではなく、ぜひこうしたことを取り入れて、子ども達が意欲的に面白がって取り組めるような授業の開発ができればと思います。

<渡部委員>

随分改善されていますよね。少々間違ってもいいから、この人に意思を伝えたいとか、この人の言ってることを知りたいとかいう前提がしっかりあれば、うまくいくのではないかと思います。

<坂越委員>

留学生を活用するのは絶対に必要だと思います。企業も巻き込んで、英語を勉強して世界でこんな仕事ができるんだということを、中学生あたりには是非伝えていただきたいですね。

<藏田市長>

それによって視野が広まる可能性もありますね。話せるようになれば、とても就けそうにないと思っていた職業にも就けるようになるかもしれません。例えば、英語の歌などで、初めは意味が分からなかったけれど、何回も歌っているうちにだんだんと意味が分かってくる、そんなことでいいと思うんです。日常生活の中で、身近な野菜の名前とかを通して学んでいくという取り組みをやってもらいたいですね。

<織田委員>

いま言われた歌については、すでに英語活動でやっています。英語の歌を歌ったり、身近なものの名前などの絵とスペルを見せて発音をさせるなど、ある程度までは英語活動でできます。そこから教育へ繋げるところが難しいと思います。慣れ親しむところで終わってしまっているというところが、今度英語科になる理由なのかなと思っています。

私も小学校の教員でしたが、自分で責任を持って45分英語を教えなさいと言われると、とても不安があります。特に発音の自信がない、耳で聞けないという不安があります。中学校の先生は英語の教科の免許を採っておられますから。ある市では、5、6年の英語の授業では、必ず担任と英語の堪能な方の2人でされているそうです。予算の関係などある

と思いますが、英語の授業に不安のある教師が、役割分担をすることで授業を充実したものにできるということが、大事ではないかと思います。

<藏田市長>

委員の皆さまから様々なご意見をいただきました。そろそろ時間も迫っておりますので、これからの方向性も含めて、津森教育長から、入れてみたいこと、やってみたいことなど、まとめて頂ければと思います。

<津森教育長>

様々なご意見を伺いまして、私自身も視野が広がったように思います。特に留学生は日本が好きで来られているというお話がありました。確かに、学校で一緒に学んでみると、何にでも積極的に協力して下さいます。こうした場をもっと活用しなければいけないと思いますし、企業とも連携をして何等か進めたいと思います。また、人の問題については何かと難しいところもありますが、委員さん方からもありましたように、教材の工夫活用などもあります。様々な形で環境の整備を進めて、学校をしっかりと支援していきたいと考えています。

<藏田市長>

いま教育長が言われたことは、これまで出された意見がすべて含まれているんだろうと思います。私たちはこれからの日本をどういう子ども達がどう作っていくのか、しっかり方向性を示さなければならぬと思っています。そうした中で、英語の大切さ、各国のつながり、世界の出来事に対しても興味関心を持ち、様々なことに取組んでいける子どもを育てていきたいと思っています。

本市の教育としては、いろいろなご意見が言われていると思いますが、目標を持って取組めば、必ずいつかいい時が来ると思います。本日も貴重なお時間をいただき、ご意見を頂戴しました。これを取りまとめさせていただいて、未来にはばたく国際学術研究都市の中身を次の世代へしっかり教えていきたいと思っています。

本日は大変ありがとうございました。

○閉 会